

2018 年 1 月 14 日（日）「いのちのパンを与え給うイエス ～五千人の給食～」

マタイ 14:13-21

13 イエスはこのことを聞かれると、舟でそこを去り、自分だけで寂しい所に行かれた。すると、群衆がそれと聞いて、町々から、歩いてイエスのあとを追った。14 イエスは舟から上がると、多くの群衆を見、彼らを深くあわれんで、彼らの病気をいやされた。15 夕方になったので、弟子たちはイエスのところに来て言った。「ここは寂しい所ですし、時刻ももう回っています。ですから群衆を解散させてください。そして村に行ってめいめいで食物を買うようにさせてください。」16 しかし、イエスは言われた。「彼らが出かけて行く必要はありません。あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい。」17 しかし、弟子たちはイエスに言った。「ここには、パンが五つと魚が二匹よりほかありません。」18 すると、イエスは言われた。「それを、ここに持って来なさい。」19 そしてイエスは、群衆に命じて草の上にすわらせ、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて、それらを祝福し、パンを裂いてそれを弟子たちに与えられたので、弟子たちは群衆に配った。20 人々はみな、食べて満腹した。そして、パン切れの余りを取り集めると、十二のかごにいっぱいあった。21 食べた者は、女と子どもを除いて、男五千人ほどであった。

【序論】

「アンパンマン」の生みの親であるやなせたかしさんが亡くなったのは、2013 年 10 月 13 日。私たちの記憶にも新しいでしょう。今も全国の子どもたちに絶大な人気を誇る「アンパンマン」ですが、原作は 1969 年に書かれたと言われております。かれこれ半世紀の歴史を持つ作品であることに驚きました。元々の設定と現在の作品との間には、多少の違いがあり、幼い子ども向けの作品を目指す上でデザインも変わったようですが（元々 8 頭身だったのが 3 頭身になったそうです）、空腹の人のところにパンを届けるという骨子は一貫しています。これは、やなせさんが戦争を体験し、戦中・戦後の深刻な食糧事情から、「人生で一番つらいことは食べられないこと」という考えをもっていたことによるそうです。このアンパンマンは、自分の顔を食べさせて、空腹の者を満たしてあげる。顔の一部を与えると力が半減すると分かっている、目の前の人を見捨てることはしない、そういうヒーローとして描かれております。「ほんとうの正義というものは、けっしてかっこうのいいものではないし、そしてそのためにかならず自分も深く傷つくものです」という言葉も残しておられます（Wikipedia「アンパンマン」参照）。やなせさんがクリスチャンだったということを知ったのは、割と最近のことでした。

【本論】

今日は「五千人の給食」という有名な箇所を扱います。パン（食べること）がこの箇所の中心にはありますが、この人間にとっての最も基本的な必要を考える時、私たちにとっても無関係ではなくなってくるでしょう。主イエスはパンに関する多くの話をされました。また、自分自身をパンに譬え、弟子たちに随所でパンを与え、ご自身はパンを食べることを意図的に拒絶なさったこともあります。

本論 1. 養われない群衆／休みたい弟子たち

イエスはこのことを聞かれると、舟でそこを去り、自分だけで寂しい所に行かれた。すると、群衆がそれと聞いて、町々から、歩いてイエスのあとを追った。（14:13）

「このことを聞かれると」とは、バプテスマのヨハネが惨殺されたことです。今日の箇所は、実はヨハネの死と深い繋がりがある。ヨハネは主イエスの先駆けであった。そのヨハネが殺害されたということは、次は主イエスが狙われる可能性が高かったのです。「寂しい所に行かれた」とありますが、これは一面においてヘロデの魔の手を逃れるためであったでしょう。マルコの文脈では、伝道旅行から帰ってきた弟子たちを休ませる意図で寂しい所へ行かせたと書かれています（マルコ 6:31）。しかし、群衆は尚も一行に付きまとい、先回りして待っていたというのです（マルコ 6:33）。休みたいのに休めない主イエスと弟子たち。人々は明らかに何かを求めていました。霊的な渇きがあったのです。ヨハネという偉大な指導者を失った民が一举に主イエスに向かっていったことも頷けます。羊は良い牧者を求める。導きが必要な人間の姿であります。

イエスは舟から上がると、多くの群衆を見、彼らを深くあわれんで、彼らの病気をいやされた。（14:14）

疲れているのに付きまとわれたら、私たちならうんざりするでしょう。弟子たちは愕然としたかも知れません。ところが、主イエスは違いました。群衆を深く憐れまれたというのです。ここでは「σπλαγχνίζομαι」という言葉が使われていて、「はらわた」を意味する名詞に由来します。主イエスのはらわたがギュッと痛むように憐れみの念が溢れ出たということでしょうか。そして、マルコでは「教え始めた」と言われていますが（マルコ 6:34）、同時に病気の癒しもなさったようであります。

夕方になったので、弟子たちはイエスのところに来て言った。「ここは寂しい所ですし、時刻ももう回っています。ですから群衆を解散させてください。そして村に行つてめいめい食物を買うようにさせてください。」（14:15）

群衆はいつまでも主の許を離れなかった。時を忘れて教えに聞き入り、癒される喜びに浸っていたのでしょう。一方、弟子たちは限界が来ていました。彼らの提案の裏側には、群衆から解放されたいという思いが隠れているように思われます。「夕方」とは、日が傾きかけた時間帯のことでしょう。電気が普及していなかった時代、人々は日没を迎えると眠りました。夕食を食べて床に就かなくてはならない。弟子たちが彼らを帰らせようとしたのは一面当然のこととも言えます。私のようにせっかちな人間は、一番家が遠い人の帰り道の時間を逆算して、早々に解散を求めるかも知れません。この時の群衆はどういうつもりだったのでしょうか。仕事や家庭のことは一体どうするのか。それさえも脇に置いて、主イエスと共にいることを求めていたのです。これは一つの「集められた民」の姿と言えるでしょう。主イエスはこの民の心を喜ばれました。

本論 2. 天国的饗宴の予表

しかし、イエスは言われた。「彼らが出かけて行く必要はありません。あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい。」(14:16)

主イエスは弟子たちの思いを知った上で、意表を突くことをお命じになりました。帰らせるのではなく、食べ物を与えよと。マルコでは、ここで弟子たちが反論をしている。

私たちが出かけて行って、二百デナリものパンを買ってあの人たちに食べさせるように、ということでしょうか。(マルコ 6:37)

「こんな何もない場所でどうやって与えるんですか？」という冷笑を含んだ言い方でしょう。

しかし、弟子たちはイエスに言った。「ここには、パンが五つと魚が二匹よりほかにありません。」すると、イエスは言われた。「それを、ここに持って来なさい。」(14:17-18)

これは最初から手元にあったということではありません。ヨハネ福音書では、アンデレがパンと魚を持っている少年を連れてきたとされています(ヨハネ 6:9)。弟子たちは群衆の中から探し回って、どうにかこの少量の食べ物を持っている子どもを見つけたのです。これが彼らにとっての重要な任務でした。主はこの小さな奉仕を基盤として、ご自身の御業を始めていかれる。あくまでも弟子たちとの協働を大切にされるのです。例えば、私たちがしている奉仕というのは、実に小さなことなのではないでしょうか。教会に友に連れてくる。そこからは主に導きを委ねていくのです。

そしてイエスは、群衆に命じて草の上にすわらせ、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて、それらを祝福し、パンを裂いてそれを弟子たちに与えられたので、弟子たちは群衆に配った。(14:19)

さて、ここからいよいよ「五千人の給食」の奇跡が起きるのですが（実際には男女子ども合わせて一万人を超えたか）、重要なことは、主イエスがこの食事を持っておられるイメージです。ここで使われている語句を調べてみますと、興味深い事実が分かってくるのです。まず、「**草の上にすわらせ**」とあります。当時のユダヤでは、宴会の時に横になり、左手で上半身を支え、右手で食べ物を取って口に運びました。そのような姿勢が想定されているようなのですが、つまりこれは正式な宴会を意味するのです。更に、「取り」「祝福し」「裂き」「与えた」という4つの動詞は、主イエスが幾度となく行なわれた食事会の記事で常に登場します。

- ・ 五千人の給食を伝える4つの記事（マタイ 14:19、マルコ 6:41、ルカ 9:16、ヨハネ 6:11）
- ・ 四千人の給食を伝える2つの記事（マタイ 15:36、マルコ 8:6）
- ・ エマオ途上での弟子たちとの食事（ルカ 24:30）
- ・ 最後の晩餐を伝える4つの記事（マタイ 26:26、マルコ 14:22、ルカ 22:19、I コリント 11:23-24）

以上の記事との共通点から見て、主イエスがこの食事を持っておられるイメージとは、天国の饗宴でありましょう。殆どの人は、その食事の意味を知らず、与えられるままに受け取って食べたに過ぎないと思われます。しかし、主はこのような形でイスラエルの迷える羊を永遠の食卓に招いておられたのです。

本論3. 自分自身を与える主イエス

今日はこの後、聖餐式を執り行ないます。聖餐式で読まれる聖句に「**これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい**」（I コリント 11:24）という表現があります。これは裂かれたパンが主イエスの裂かれた体を表すということ、を、陪餐者の心に刻み込むものです。主は自分の命を与えるとっておられることになる。五千人の給食でも、主はご自分の受難をそれとなく予告しておられることになるでしょう。誰も知らないことであつたかも知れない。しかし、主はヨハネの死に続くものとして、ご自分の死をこの食事を通して予告しておられるのです。ヨハネはヘロデの忌まわしい宴会において殺されました。ブラックユーモアをひっくり返すかのように、それに真っ向から立ち向かうかのように、主は自ら死に赴き、自分の命を多くの人に与えることを、この五千人の給食を通して表現されたのです。

冒頭でアンパンマンのことを少しお話ししました。ご存知の方も多いと思いますが、ジャムおじさんとバタ子さんが歌っている歌の中に、こういう歌詞があります。PP

おいしいパンをつくろう
生きてるパンをつくろう
いのちがけでつくろう
いのちのパンを

この歌詞については賛否両論あるのですが（怖いと言う人もいる）、クリスチャンが聞くとピンとくるものがあります。「いのちのパン」、それは主イエスのご自身を指して言われた言葉にほかなりません。

イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。モーセはあなたがたに天からのパンを与えたのではありません。しかし、わたしの父は、あなたがたに天からまことのパンをお与えになります。というのは、神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものだからです。そこで彼らはイエスに言った。「主よ。いつもそのパンを私たちにお与えください。」イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことがありません。（ヨハネ6:32-35）

イスラエル人はエジプトでの奴隷生活から解放されて後、40年間荒野を彷徨った期間、天からのマナによって養われました（出エジプト 16:4-36、民数 11:4-9）。彼らはそれを食べて満腹し、誰一人足りない者はいませんでした。同様に、主イエスは辺境の地で（荒野のイメージと重なるか）、パンを割いてイスラエルの民を養われた。更に、究極的には、主は十字架上でご自分の肉体を割いて（いのちのパンそのものとして）、信じる者に永遠の命を惜しみなくお与えになったのです。

人々はみな、食べて満腹した。そして、パン切れの余りを取り集めると、十二のかごにいっぱいあった。食べた者は、女と子どもを除いて、男五千人ほどであった。（14:20-21）

ここでさりげなく書かれている「十二のかご」というのも象徴的です。これは恐らく、イスラエル十二部族を表しているでしょう。つまり、主はご自分の命をもって、神の民全体を満たし、すべての人に命を与えたいと願っておられたのです。そして、パンくずが拾い集められたところには、その死が少しも無駄にならないようにとの、主の涙の願いが込められているでしょう。

【結論】

今日は敢えて「聖餐の心得」を書きませんでした。メッセージの内容で十分だと思ったからです。主イエスのご自分の命を捨てたのは、それを私たちに与えるためでした。私たちが永遠に生かすためには、ご自分の命は惜しくなかったのです。主イエスがどん

なに疲れていても、群衆を決して帰らせなかったことは、主の一貫した愛を示しているでしょう。私たちも信仰をもって、この「いのちのパン」を受け取りたいと思います。そして、主の死を無駄にすることのない献身の道を歩み抜きたいと思います。

【祈り】

いのちの君なるイエス様。あなただけが私たちに真のいのちを与えることがおできになります。5000 人以上の人々にパンをお与えになった時、あなたは何を思っておられたのでしょうか。永遠のいのちにあずかせようというあなたの御思いを悟った人は一人でもいたのでしょうか。私たちにも差し出されている「いのちのパン」を、ただ感謝をもって受け取ることができるよう、お助けください。そして、このパンをもって、私たちが神の支配の下に生かしてくださいますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

イスラエルの民を 40 年に亘って「天からのパン」なる「マナ」によって養い給うた、父なる神の愛。

多くの人にいのちを与えんと、十字架の苦しみを忍び給うた、主イエス・キリストの恵み。

差し出されたパンを、ただ信仰をもって受け取らせ給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。